

フリージャーナリストはいかに政治をえぐるか？

常井 健一



常井健一 氏

常井健一と申します。現在40歳，都内在住。子どもは一人います。フリーランスでものを書いて，ちょうど7年が終わったところです。

先ほど，司会の岡田憲治（法学部）教授からも私の経歴についてご紹介があったように，今の目の前にいる皆さんのように大学生だった時代から，インターネットを使って日本の風景や世相を捉えた映像を中国に無料配信しようという試みをしていました。当時は2000年前後で，インターネットの黎明期だったんです。就職氷河期でもあったので，私は企業の就職試験を一切受けませんでした。厳しい就職戦線で仕事が決まらず大切な時間を消耗するのではなく，自分で起業してみようと思っていました。

しかしながら，日本人の学生と中国からの留学生が一緒になって，それを企業化しようとしたらうまくいきませんでした。その後，仲間の一人が，ライブドアという，今のLINEという会社の源流にある会社に合流して，新しいニュースメディアを立ち上げました。私はそのチームに加わって，ライブドアニュースセンターという組織で

働き始めました。新聞社やテレビ局のように、自分たちで取材して書いた原稿をネットだけに流すという日本初のネット専業報道機関です。2004年の暮れのことでした。それ以来、マスメディアに携わる人生が始まったわけであります。

もう、16年前の話なので、大学生の皆さんは物心もついていない頃かもしれませんね。2006年1月には、そのライブドアを舞台とした粉飾決算事件があって、六本木ヒルズの38階にあった私たちの職場に東京地検特捜部の捜査官たちが突入してくるという経験をしました。社長だったホリエモンこと堀江貴文氏ら経営陣が逮捕され、我々のニュースセンターは事件にまったく関係なかったのですが、経営環境が激変する中で閉鎖されてしまったんですね。株価の急落に乗じて大株主になったハゲタカファンド主導の経営改革の一環で、ニュースチームの大半が解雇される中、私は、運良く東京・築地にある朝日新聞の出版部門のほうに転職することができました。それを機に、私はネットメディアから紙メディアに移り、ネット企業ではできなかった経験を積むこととなります。

30歳の前後、その朝日新聞出版という雑誌や書籍をつくる出版社に5年ほど勤めました。『AERA』という週刊誌の編集部で記者として働き、自民党から民主党に政権交代する前後の政治の現場を取材したり、有名人に定期的に会って、彼らの連載原稿を編集したりしました。2011年3月11日に東日本大震災が起きたときには、翌日から宮城県の被災地に入り、津波被害の現場を泥だらけになりながら走り回りました。

その直後、31歳の時に会社を辞め、オーストラリアに留学します。1年後に日本に帰ってくると、2012年末だったんですが、民主党政権の野田佳彦総理が解散総選挙に打って出ました。政権が民主党から自民党に戻った選挙なので、皆さんも覚えていると思うんですけども、私は当時、オーストラリアから帰ってきたばかりなんですが、「とにかく今、再始動しなくちゃ政治取材の現場に戻るチャンスがなくなっちゃう」と思って、それから、組織に属さないフリーランスライターとしての人生が始まります。自分の筆一本だけを頼りに必死に走ってきて、今まで7年ぐらいたったというのが、ここに立っている今の私です。

さて、これから30分間ほど、最近の自分が考えていること、やっていることというものをご紹介していきたいと思います。

まず、普段、私は、このジャーナリストという肩書きをあまり使いません。ノンフィクションライターと名乗っています。皆さんはジャーナリストと聞けば、新聞記者、

テレビ記者に近いようなイメージをされると思います。ジャーナル、つまり定期刊行物にニュースを書く職業。毎日、新聞に記事を書く、テレビのニュース番組でレポートする。政治報道だったら、ある大臣に一日中、べた張りして、週に数回ある記者会見に出席して、毎日の動静を伝えていく。皆さんが思っているジャーナリストとはそういう仕事でしょう。

最近、新聞を定期購読する家庭が激減しています。例えば、業界トップの読売新聞は長い間、「販売部数1000万部超」と誇示してきましたが、2011年に1000万部を割り込み、直近では800万部を下回っています。名古屋や札幌の人口と同じ読者が一気に消えてしまったんです。他の新聞も似たように業績が落ち込んでいます。だから、皆さんの中には、新聞を買わない、紙で読まない人も多いと思いますが、新聞の一面トップの記事、あれで何文字あるか知っていますか。答えは、だいたい600、700字です。長くても1000字は行きません。政治面には100字にも満たない記事もあります。つまり、新聞やテレビの記者は短距離走みたいなことをしている。

一方、私はどちらかというと、マラソンであったり、1万メートル競走であったり、長い原稿をじっくり手間暇かけて書き上げるということをしております。基本的には2000字以上。1万字という原稿も平気であります。掲載媒体は、主に月刊誌や週刊誌です。新聞と同様、ジャーナルの一種ではありますが、連載を持っている雑誌ではない場合、一つのテーマに2、3か月にわたる取材を行ってから、だいたい一週間くらいかけて原稿を完成させます。

また、一年に一冊は書籍を出しています。これは約10万字、長いものだと20万字以上。350ページくらいの分量になります。これまで雑誌に書いた原稿をまとめる場合もあるし、一から手掛ける場合もあります。取材期間は数か月のものから、10年近くかかるものもあります。だから、新聞やテレビのジャーナリストとはやや異なる仕事だと思っています。

そもそも、私の立場について、フリーランスという立場について説明をしなくちゃいけません。基本的にフリーは、会社組織に属せずに、いろんな人の話を聞いて回り、記事にします。記事は、雑誌を発行する出版社や最近だとインターネット企業に売り、その会社が運営する媒体に掲載されます。私のビジネスパートナーは、編集者と呼ばれる人たちです。

組織に属していたときと比較すると、私の場合、朝日新聞出版は朝日新聞社の子会

社ですけれども、当時は永田町を歩く新聞記者がみんな持っている国会記者証というものを首から下げて、国会を自由に出入りしていました。雑誌記者だったので、番記者のように特定の政治家を担当するわけではなく、ニュースに応じて、関係のある議員を取材する。議員会館という国会議事堂の裏手に、全国会議員の事務所が入ったビルが三棟建っているんですが、各事務所のドアをノックして、「こういう話で、おたくの議員に話を聞かせて」と秘書にお願いして、アポイントを取って、お話を聞くというようなことをしていました。

しかし、フリーの場合は、まず、記者証がもらえません。なので、どうやって国会の中に入出入りするかということから悩みが始まるんですね。フリーランスの立場で、政治を日々取材している書き手というものが、今ではおそらく50人もいないんじゃないかな。そのくらい、数は少ないんですが、その一番の参入障壁がフリーには記者証が発行されないこと。しかも、どんなに画期的な記事を書いても、交渉を努力してももらえない。その結果、国会議員にアクセスすること自体が、新聞、テレビの記者がやるよりも難しい。

国会記者証を持っていると、どの政党が、どの大臣が、何時何分に記者会見をするというふうな知らせがひっきりなしにメールで来ますので、言ってしまえば、自分で何の努力をしなくても大物政治家に質問できるという機会にありつきますが、フリーには、それが無い。

じゃあ、どうするかということで、私がフリーになった2012年の末から始めてみたのは、その政治家が国会の外にいるときに、アポなしで会いに行くということをしたんです。

その一つの例が、街頭演説です。選挙になると政治家は町場に出て、不特定多数の有権者を前に演説をします。誰もが自由に歩ける街頭ですから、入れないとか、聞けないというふうな規制はありません。誰にでも聞かせるための空間というものが街頭演説の会場です。全国各地の会場を訪ね歩くことによって、その前後に、目当ての政治家をつかまえてお話を聞ける。私の場合、小泉進次郎さんという政治家を2012年から選挙のたびに取材しました。彼は2週間の選挙戦で全国60か所ほどを応援行脚をするんですが、その街頭演説の現場に何度も行って、移動中の駅のホームや空港で質問をぶつけるという手法を編み出しました。

最近の小泉さんはちょっと違うんですけれども、以前は決してマスコミの単独取材を受けないというポリシーを持つ政治家だったんです。なので、テレビであれば、新聞

であれ、私みたいなフリーであれ、取材を申し込んでも、サシで会ってくれなかった。じゃあ、どうすればいいのかと考えたときに、誰でも入れる空間で彼に声を掛けてみることを、国政選挙の間、二週間ほど毎日試したんです。すると、どのマスメディアにも流れていない肉声が取れた。取材お断りの人間の取材を、そうやって成功させたんです。

実は、昨日の夜に、とあるインターネット番組で私と同じような立場で政治の取材をしている同世代の畠山理仁さんというフリージャーナリストと一緒に話す機会があったんです。この1年間の政治を振り返るというテーマでした。安倍政権というものは結構メディアに対していろいろ規制が厳しいとか、悪いことを書くと睨みをきかせるというふうなイメージが、皆さんに何となく伝わっていると思うんですが、そこで畠山さんと話して気が付いたのは記者クラブの外側にいる記者のほうが、この7年間、安倍一強政治をえぐってきたんじゃないかなということだったんですね。

例えば、大臣の不正を徹底的に追及し、辞任にも追い込んだというふうなスクープを発信したのは、日々政治家にアクセスできる新聞、テレビなど記者クラブに属しているメディアではなくて、週刊文春や週刊新潮、つまり、週刊誌なんです。

最近では、週刊文春が菅原一秀・経済産業大臣とか河井克行・法務大臣、ちょっとさかのぼると甘利明さんといった大物が、大臣在任中に不正を報じられて辞任した。週刊新潮だと、例えば小淵優子さん。支援者に特製のワインを配ったことが明るみに出ると、その後、元秘書が逮捕されました。その他にも「うちわ」で追及された松島みどりさんも大臣を辞任に追い込まれ、結果的に2014年冬の解散総選挙につながる安倍政権の転換点になりました。

なぜ今、週刊誌の例を挙げたかといいますと、実は編集部で働いている人というのは、出版社の社員もいるんですけども、大部分が編集部と専属契約しているフリーライターが週刊誌の名刺を持って取材をして、記事を載せるということをしているんですね。

つまり、その文春、新潮で大臣のクビを取るような不正を暴いたのは、我々と同じように記者証を持っていない、そして、政治家へのアクセス権というものが無い中、彼らの居場所を突き止め直撃する一方、不正にまつわる文書などを集めたフリーランスなんです。

もう1つ、私や、先述した畠山理仁さんのような完全フリーランスのライターとい

うものが政治をえぐるという事例も結構あります。例えば、布施祐仁さんというフリージャーナリストがいますが、その方が南スーダンに派遣されていた自衛隊の日報を情報公開請求したところ、防衛省が「すでに破棄した」とウソの回答をしたという隠蔽体質というものが明るみになって、当時の稲田朋美大臣の辞任にまで発展したことがありました。フリージャーナリストが、その情報公開請求をしたことが、防衛省の宿痾を炙り出す一つのきっかけになった。これは、フリー発の問題追及の大きな事例だと思います。

あと2つぐらいを例を挙げます。著述家の菅野完さんという方がいるんですが、彼は森友学園の特異性というものを日本会議という保守系の政治団体の研究をしながら明るみに出しました。幼稚園児に軍歌を歌わせ、教育勅語を暗唱させる森友学園での異様な光景を初めて取り上げて、こんな教育をさせて大丈夫かという疑問を呈し、その背後にある安倍総理や昭恵夫人の人脈、後の財務省文書改ざん問題へとつながる不正の温床とも呼ぶべき権力図式を暴いた。

もう1つは、2017年の衆院選のときに小池百合子都知事が希望の党を立ち上げました。民進党が解体され、そこに合流するという動きがあったんですけども、あのとき、自民党を取材していると、「もうこれは下野だな」と、自民党の中では負けを結構覚悟した方が多かったんです。野党が政権を取るんじゃないかという空気の中、小池さんが記者会見をしたときに、フリージャーナリストの横田一さんという方が質問したところ、いわゆる排除発言というのが出て、希望の党に対する期待感が一気にしぼんだということがありました。

最後の事例は、さっき挙げた畠山さんですね。今年(2019年)の1年間は、亥年選挙といういろんな種類の選挙が集中する年だったんですけども、やっぱり注目されたのは「NHKから国民を守る党」とか、「れいわ新選組とか、従来の政治勢力を源流とする新党とはまったく違った雰囲気、ルーツを持った新党が注目されました。このN国と、れいわの動きというのは、これまでほとんどマスメディアで報じられなかった。実際には、選挙直前から取材をしても報じないという状況があったんです。

このN国やれいわはもちろん、今年の統一地方選で東京都港区議に初当選したマック赤坂さんら、いわゆる泡沫候補とか、諸派とかと呼ばれて、まともに報道されない無名の候補者というものを、実は20年前からずっと取材してきた方が、その畠山さんなんです。このN国、れいわの現象というものは、既存の記者クラブメディアには知識の蓄積もないから、突然議席を獲得されても、どう捉えていいのかわからないの

です。ということで、どういうふうに解釈、分析すればいいのか、マスメディアの人間がフリーに取材するという珍しい現象が起きた。これは、今年あった特筆すべき出来事だったのではと思っています。

ここまで話を聞いていると、私が雑誌出身だから、フリーだから、新聞を軽視していると思われるかもしれませんが。実は、新聞も健闘しているんです。全国紙よりもブロック紙が頑張っているという状況も、安倍政権の中で顕在化した現象です。

例えば、1月に、厚生労働省の統計不正問題がありました。これは大臣が辞任に至るようなところまではいかない話だったんですが、実はこれは朝日新聞が取り沙汰してから大きな問題として世の中に認識されました。でも、実は朝日新聞がスクープする3か月前、2018年9月時点で西日本新聞という福岡市に本社がある九州のブロック紙の、東京にいる担当記者が問題点を見つけ、第一報を打った問題なんです。当時、全国紙は西日本新聞のスクープをまともに追わず、政府を追及することもなかった。そういった話なんです。

他にも、東京新聞の望月衣塑子さんという記者が、菅官房長官の記者会見でアグレッシブな質問をする様子をご存じだと思いますし、森達也さんという映画監督が彼女を主人公としたドキュメンタリー映画を作ったりしたんですけれども、その望月さんもブロック紙の記者です。東京新聞は、言わば、中日新聞という名古屋圏のブロック紙の東京版なんです。

最後に「桜を見る会」も、大新聞ではなく、共産党機関紙の赤旗から始まった。総理がぶら下がり会見でおおむね説明が済んだというような感じの状況をつくり上げようとしたら、その現場でもやっぱり食らいついたのは西日本新聞の記者だったんじゃないかな。そんなふうには、ブロック紙の記者の頑張りというものが、大手メディアの記者たちを突き動かしている、良い意味での緊張感を与えているという機運というのが、安倍一強政権の中でも高まってきたんじゃないかなと思います。

皆さんは日々、マスメディアが報じる政治ニュースにはがっかりすることが多いと思うんです。本来は政治をチェックすべき記者が権力におもねっている感じがする。あるいは、逆に、無駄な批判ばかりしているようにも見えるでしょう。ですが、来年(2020年)からは、安倍政権に対する態度も変わっていくんじゃないかと思っています。なぜならば、安倍総理の自民党総裁任期は2021年秋までですから、東京オリンピックを終えれば、残り一年ということになります。次期総裁選に向けた権力闘争が本格化

すれば、これまで安倍総理に遠慮していた自民党内の大物政治家、官邸官僚が幅を利かせる時代が続く中で周縁に追いやられていた省庁とかの逆襲が始まる可能性がある。つまり、彼らの一部が安倍政権に都合の悪い情報を明るみに出し、長期政権の膿を出そうと試みる。ひょっとしたら「桜を見る会」よりもインパクトのある不祥事が漏れ出てくるかもしれない。そう見えています。

最後に、今話題の「桜を見る会」のお話をします。実は私は「桜を見る会」に呼ばれているんです。この3年ぐらい連続で……ということをお話すると、皆さんの目の色が一瞬で変わりましたね(苦笑)。

ざっくばらんに話しますと、ニュースでも報じられているように、招待者には内閣総理大臣・安倍晋三という署名が入っている結婚式の案内状のような白い封筒が届きました。日時や場所が書かれてある厚紙には今言われている「60番台」とか安倍総理に近いと言われる番号が打たれたものではなかったと思うのですが、とにかく同じものが私の自宅にも届きました。そういう形で3年前から計3回呼ばれて、うち2回行きました。

これをもたらったとき、ジャーナリズムに携わる人間としてどう受け止めるか。これはフリーならではの考え方だと思うんですけども、記者クラブに属していないと政治的なイベントにだいたい呼ばれることがないんですよ。せいぜい一年の一度の党大会くらいは日程と会場さえわかれば、入り口で名刺を渡してスムーズに入れてもらえます。それ以外は党本部で行われる記者会見に限らず、政治家の側が広く取材してほしいイベントでさえも、記者クラブの部屋にプレスリリースが張り出される形が多いので、その部屋に入れない我々フリーは会合の存在すら知ることができません。

ましてや、政党ではなくて、首相官邸の場合はフリーが出入りするにはさらに高いハードルが存在します。実際、安倍政権になってから総理記者会見に入れるよう新たに登録されたフリーはいないんじゃないかな。だから、私が正式な広報窓口で「桜を見る会」取材したいので入れてほしい」とお願いしても無駄でしょう。じゃあ、案内状が来たんだったら、それを私に対する取材許可だと解釈しようというのが、私の理屈付けです。

これは正直言って、誰が私を推薦して招待してくれたかはわかりませんでした。調べてみたら、知り合いの自民党関係者が私を推薦したそうなんですけれども、招待す

る側は、私という人間が見聞きしたものを文字にして公開するような存在だということとは事前に知っているのだから、リストアップされた時点で「常井に書かれる」、つまり私から解釈すれば「取材許可が下りた」と言っても同然でしょう。

そもそも、フリーか組織人かに関係なく、虎穴に入らずんば虎子を得ずという精神が政治取材には必要です。呼ばれたものは行ってみる。呼ばれていないのも行ってみる。問題になるのは、呼ばれたから、入れてもらえたから、その政治家に甘くなるとか、持ち上げるとか、そういう日和見な態度です。マスメディアが横並びで取材できる機会には減多に呼ばれない、入れてもらえない、そもそも相手にされないという三重苦を抱えているのがフリーですから、温かく迎え入れられたら、私も人間ですから感情が動きます。しかし、それに引っ張られると、書くものが概してつまらなくなります。もっと言えば、嘘っぽくなる。そういうメディアの嘘は読者にすぐに見抜かれ、一瞬にして信頼を失うことになります。

「桜を見る会」は税金で開かれているイベントであり、お酒や食べ物が参加者に無償で振る舞われます。皆さんの予想に反して、意外とつまらない食べ物ばかりで、焼き鳥を1皿に2本ぐらいもらうのに30分ぐらい並ばされるんです。今考えてみると試しに食べてみても良かったのかもしれませんが、私は出されるものは食べずに、会場を眺めてはカメラに収めていました。私は招待状で入った一参加者ではあるんだけど、取材者である。その本分は譲らず、その会場の中で一番冷静に見つめる傍観者として見にいこうということで行ったわけです。安倍総理や昭恵夫人に近い人たちとはどんな顔をしているのか、というのを自分の目で確かめようというモチベーションです。

ただ、1つ後悔があって、ちょうど森友問題が取り沙汰されたばかりの2017年春にも「桜を見る会」があったんですね。やっぱり、行くと異様な雰囲気だったわけです。私は仕事柄、政治関連のイベントでお呼びにかかる人の顔ぶれ、芸能人や文化人も含め、だいたいこの空間に入れる人の佇まい、コードというものが、何となくイメージできます。しかし、その年の「桜を見る会」は、明らかに違う空気なわけですよ。各分野の功労者というよりも、安倍総理や昭恵夫人の「お友だち」がかなり多数混じっているなという印象はありました。政治家関連の集まりというのは、良くも悪くも超えてはいけないう一線というものがあって、みんながどこかでその感覚を共有しながら自制している。しかし、その年の「桜を見る会」は、やけに浮ついた雰囲気、[?]マークがずっと私の頭の中に浮かんで消えずにいたんです。

だから、当時そのことを記事にしなかったということは反省しているんです。その

時点ではニュースバリューが大きいから記事にできなかったということなんですけれども、確かに疑問を感じた。しかも、今こんなに問題になっているんだから、そのときの違和感を放っておかずに背景をしっかりと調べれば良かったという、今となつての後悔はあります。

ただ一方で、ジャーナリストが呼ばれたからといって行っていいのかという議論がある。時々、後ろから矢が飛んできます(笑)。私は、我々の仕事というのは、人様に行っちゃいけないと言われるところにあえて行くという認識でいます。例えば、私は渡航自粛国である北朝鮮に、この2年間、2回行っているんです。おそらく政治家であれば外交関係上の理由で、いわゆる新聞社やテレビ局のサラリーマンならばコンプライアンスという面で、北朝鮮に入国することには非常に高いハードルがあるんだそうです。それとは別に、訪問先の北朝鮮政府や国内の窓口である朝鮮総連に受け入れてもらえるかどうかというハードルも存在します。どういうふうな立場、待遇で行くかということは、ジャーナリズムの住民としてよく考えなくてははいけません。なぜなら、入手が難しいビザと引き換えに、北朝鮮当局にとって都合の良い記事だけを書くように利用されてしまう恐れがあるからです。

入国さえできれば、日本のメディアで報じられない景色ばかりが広がっています。実際、9月の訪朝時には板門店を訪れ、南北朝鮮の兵士が銃を持っていない姿を確認できました。その2か月前、トランプ大統領が電撃訪朝をして以来の変化ですが、私はその様子を日本の新聞やテレビよりも先に北朝鮮側から眺めることができました。このように、他が追従できない情報を得られるスクープの宝庫でもあるんです。

私の場合は、それまで取材してきた人を通して行ける機会があったということなんですけど、日本人の政界関係者である彼の言動を取材する一環で北朝鮮にも同行する。いわゆる報道ビザで入国したわけではありません。日本の政界取材をするときと同様、言うまでもなく、北朝鮮政府にも忖度するような報道はしないことを決めて行きました。帰国後、向こうの政府高官と接触した時の話を元に企画を立て、週刊文春や週刊新潮に訪朝レポートを寄稿しましたが、いずれも朝鮮総連のチェックを受けずに、日本政治を扱うときと同様、クリティカルな執筆姿勢に徹し、記事を読者に提供しました。

そんな感じで、日々いろんな現場を巡りながら、政治家の言葉を通してニュースを捉えるときに、取材者である自分と政治家との距離、政党との距離というものを常に

悩みながら、しかも私は会社員ではないので、上司とかが注意もしてくれませんが、誰も守ってくれない。自分の中でその適度な距離というのを考えながら日々形にしているというのが、私、常井健一の流儀だということで、お話を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。